

# 国語科における学業不振児\*

——特に読解力について——

——各教科教育法に関する教育心理学的研究 III (国語科 その1)——

三好 稔\*\*  
広島大学 古 浦 一 郎

## I 目 的

読解を規定するものとして、文字の大きさ・その間隔・行の長さなどの客観的要因と、読手の主観的要因とに二分することができる。後者は、さらに読み手の家庭環境・学校環境、教授法などの環境的要因と、知能・性格・性・生理的条件・文字の知識・語彙などの個性的要因とに二分できるであろう(1)。

さて人間言語の特徴は単語と文字との二元性に立っている。したがって、われわれが文と考えているものは、分割の手がかりのないひとつの全体 (un tout global) ではない(2)。文を分割する手がかりとなるのは単語であるから、文を読解することは、単語間の関係の理解ということとその本質的な出発点とし、さらには、文と文との関係の理解へ進むものと考えられるであろう。それゆえ、個性的要因のうちで、このような語関係や文関係の理解は、読解を規定する基礎的要因と思われる。

この意味において、本調査は、国語科における学業不振児(ただし、国語科の成績不良の者をさす)が優秀児に比べて、語関係や文関係の理解という点でどのように相違しているかを明らかにし、ひいては国語科教育法改善のための基礎資料を提供しようとしたものである。

## II 方 法

### A. 第I調査

a. 問題形式 困難度に応じて5種の形式を作成した。各形式にはいずれも次の問題領域が含まれている。

\* Psychological studies on learning of school subjects: III. —Children of inferior ability in learning the Japanese language—

\*\* by Miyoshi, Minoru & Koura, Ichiro (Hiroshima University)

b. 問題領域(1) 1個の文における主語の理解(2) 1個の文における述語の理解(3) 省略された主語の理解(4) 主語と述語との距離を異にしたときの主語および述語の理解。(1) (2) (3) は語関係に、(4) は文関係に関する問題領域である。

c. 調査問題(1)の問題としては、構造上からみた3文種(単文・複文・重文)と機能上からみた3文種(陳述文・感歎文・疑問文、ただし命令文では主語がないから問題の作成が不可能)とを組み合わせた9問から構成されている。(1)の例は次のようなものである。

みちおさんは1ねんせいです(第1形式・単文・陳述文)、1ねんせいは(1. まさおさん, 2. みちおさん, 3. はるこさん, 4. かおるさん, \*. わかりません)です。

(2)の問題もこれと同じような9問である。(2)の例としては、

たけしさんはほんをよみ、さちこさんはえをかきました(第2形式・重文・陳述文)。たけしさんはほんをどうしたのですか(1. かいました, 2. かきました, 3. よみました, 4. かぞえました, \*. わかりません)。

(3)の問題は、第2の文において省略されている主語を第1の文から探し出させるもので、第2の文が単文および複文と機能上の3文種とを組み合わせた6問から構成されている。(3)の例を次に掲げる。

ひつじのようなくもがみえます。ほら、おみやのあるもりのうえをとんでいくよ(第3形式・複文・感歎文)。とんでいくのは(1. からす, 2. ひつじ, 3. くも, 4. はと, \*. わかりません)です。

(4)の問題は、

そのうちにつきがひがしのそらからでてきました。つきがそのうちにひがしのそらからでてきました。そのうちにひがしのそらからつきがでてきました。

## (第2形式中の例)

のように、述語に対する主語の距離を異にした文について、それぞれ主語と述語とを理解させるもので、6問からできている。(ハ)は第2と第3と第4の形式にのみ含まれている。

したがって、第1と第5の形式は各24問、他の形式は各30問から構成されている。

語関係や文関係を理解するには、文中の語の意味や読みを知っていることが前提条件であるから、関係の理解そのものを検するのには、問題作成にあたり文字や語意から生ずる抵抗をあらかじめ除いておく必要があった。

これらの問題は、広島市の小・中学校各2校計812名にあらかじめ実施し、だいたい適当であることが確かめられていた。

d. 調査対象 小学校2年および5年・中学校Ⅱ年の児童生徒、各学年とも広島市内3校と近郊3校、計686名。このなかから国語科成績上位の者を各校について各学年から男女それぞれ5名ずつ、下位の者もこれと同数を抽出した。したがって、人数は各学年120名、計360名である。

e. 学年と適用形式 小学校2年には第1と第2形式、小学校5年には第2と第3と第4形式、中学校Ⅱ年には第3と第4と第5形式を与えた。したがって、小学校2年には(イ)18問、(ロ)18問、(ハ)12問、(ニ)6問; 小学校5年には(イ)27問、(ロ)27問、(ハ)18問、(ニ)18問; 中学校Ⅱ年には(イ)27問、(ロ)27問、(ハ)18問、(ニ)12問を与えたことになる。

f. 調査時期 昭和32年3月。

## B. 第Ⅱ調査

a. 問題形式 第Ⅰ調査と同じ。

b. 問題領域 (ハ)指示語の理解、(ヘ)逆接関係の理解、(ト)順接関係の理解。いずれも文と文との関係に関するものである。

c. 調査問題 (ハ)の問題としては、第2の文中にある指示語の意味するものを第1の文中から探し出させる問題を作成した。そのばあい、第2の文は構造上の3文種と機能上の4文種とを組み合わせた12問が考えられる。

(ハ)の例としては、

きれいなうんどうばですね。にいさんたちがやきゅうをしたのはここですか(第2形式・複文・疑問文)。

「ここ」というのは(1. こうえん, 2. きれいなところ, 3. みち, 4. うんどうば, \*. わかりません)のことです。

(ヘ)の問題は、主として第1の文と第2の文との関係か

ら接続詞を選択するもので、同じように12問からできている。(ヘ)の例は次のようなものである。

秋になったというのに、ことはいつまでもあつさがつづく。(1. それで, 2. だから, 3. しかし, 4. そして, \*. わかりません)さすがに、けさなど空気もひややかに澄み、風のはだざわりもころよい(第4形式・重文・陳述文)。

(ト)の問題も(ヘ)と同じく12問である。(ト)の例としては、

運命というものは、努力しない者には開けません。

(1. しかし, 2. けれど, 3. だから, 4. すると, \*. わかりません)あなたは、進んで自分の運命をきり開きなさい(第5形式・単文・命令文)。

こうして、どの問題領域についても各形式に12問ずつの問題が含まれており、これらの問題は、広島市内小中各1校計404名に実施し、だいたい適当であることが確かめられていた。

d. 調査対象 広島市内の小・中学校各3校、近郊の小・中学校各3校、計12校の各学年1学級ずつ計2579名に実施。その中から、各学級につき、国語科の成績上位の者男女各5名、下位の者もこれと同数を抽出した。したがって、中学校では上位180名、下位180名、小学校はそれぞれ360名ずつ、総計1080名の児童生徒である。

e. 学年と適用形式 小学校1, 2年にはどの問題領域についても第1と第2形式、小学校3, 4年には第1と第2と第3形式、小学校5年には第2と第3と第4形式、小学校6年以上には第3と第4と第5形式をあたえた。したがって、どの問題領域においても、小学校1, 2年は24問、他の学年は36問与えられたことになる。

f. 調査時期 昭和33年2月～3月。

## Ⅲ 結 果

a. 文の構造からみて 問題領域(イ)と(ロ)とを合わせると、1形式中に単文・複文・重文とも6問ずつ含まれている。したがって、2形式を受検した小2では各文種12問ずつ、小5・中Ⅱは3形式を受検しているから18問ずつ解答したことになる。そこで、成績群・文種・地域・性を要因として各要因ごとの平均正答数を算出し分散分析を行なうと(ただし $\chi^2$ 検定の結果危険率が5%以下で等分散の帰無仮説が棄却されたばあいには行なわない、以後もこれに同じ)Table 1となる(表中\*は5%, \*\*は1%水準を示す)。相互作用がみられるのでさらに詳細に分析し上下差の有意性についてF検定を行なった結果がTable 2である(表中×は分散の不等質を、\*

Table 1

| 学<br>年 | 問<br>題<br>数 | 平<br>均 | 要 因          |                   |              |              | 相 互 作 用     |             |             |             |             |             |             |  |
|--------|-------------|--------|--------------|-------------------|--------------|--------------|-------------|-------------|-------------|-------------|-------------|-------------|-------------|--|
|        |             |        | ①<br>上 下     | ②<br>単文 複文 重文     | ③<br>都市 近郊   | ④<br>男 女     | ①<br>×<br>② | ①<br>×<br>③ | ①<br>×<br>④ | ②<br>×<br>③ | ②<br>×<br>④ | ③<br>×<br>④ | そ<br>の<br>他 |  |
| 2      | 12          | 9.8    | 10.8> 8.8 ** | 10.1>10.0> 9.4    | 10.1> 9.6    | 0.6<10.0     |             |             |             |             |             |             |             |  |
| 5      | 18          | 15.0   | 16.1>13.9 ** | 15.4>14.2<15.4 ** | 15.3>14.7 ** | 14.9<15.1    | *           |             |             |             |             |             |             |  |
| Ⅱ      | 18          | 14.3   | 16.2>12.4 ** | 14.8>13.4<14.7 ** | 14.7>13.9 ** | 13.8<14.8 ** |             |             |             |             |             |             | **          |  |

Table 2

| 文 種    |   | 単 文 |   |     |    | 複 文 |    |     |    | 重 文 |   |     |   | 計   |     |     |     | 総<br>計 |
|--------|---|-----|---|-----|----|-----|----|-----|----|-----|---|-----|---|-----|-----|-----|-----|--------|
|        |   | 都 市 |   | 近 郊 |    | 都 市 |    | 近 郊 |    | 都 市 |   | 近 郊 |   | 性   |     | 地 域 |     |        |
| 性      |   | 男   | 女 | 男   | 女  | 男   | 女  | 男   | 女  | 男   | 女 | 男   | 女 | 男   | 女   | 都市  | 近郊  |        |
| 学<br>年 | 2 | *   |   |     |    | **  |    | ×   |    | **  |   | *   |   | 1 ② | 1   | 1 ② | 1   | 2 ②    |
|        | 5 | *   | * | **  | ** |     |    |     | ** |     |   | *   | * | 2 ① | 2 ② | 2   | 2 ③ | 4 ③    |
|        | Ⅱ | **  | * | **  | ** | **  | ** | **  | ** | **  |   | **  | * | ⑥   | 2 ③ | 1 ④ | 1 ⑤ | 2 ⑨    |
| 計      |   | 2 ① | 2 | ②   | ②  | ②   | ①  | ①   | ②  | ②   |   | 1 ① | 3 | 3 ⑨ | 5 ⑤ | 4 ⑥ | 4 ⑧ |        |
|        |   | 4 ① |   | ④   |    | ③   |    | ③   |    | ②   |   | 4 ① |   |     |     |     |     |        |
|        |   | 4 ⑤ |   |     |    | ⑥   |    |     |    | 4 ③ |   |     |   | ⑧ ⑭ |     |     |     |        |

Table 3

| 学<br>年 | 単 文       |  |            |  | 複 文       |  |             |  | 重 文       |  |             |  |
|--------|-----------|--|------------|--|-----------|--|-------------|--|-----------|--|-------------|--|
|        | 上 下       |  | p          |  | 上 下       |  | p           |  | 上 下       |  | p           |  |
| 2      | 11.0> 9.2 |  | .02> p>.01 |  | 11.1> 8.9 |  | .01> p>.001 |  | 10.5> 8.3 |  | .01> p>.001 |  |
| 5      | 16.5>14.3 |  | .001> p    |  | 15.3>13.1 |  | .001> p     |  | 16.4>14.4 |  | .01> p>.001 |  |
| II     | 16.4>13.2 |  | .001> p    |  | 15.6>11.1 |  | .001> p     |  | 16.7>12.8 |  | .001> p     |  |

Table 4

| 学<br>年 | 問<br>題<br>数 | 平<br>均 | 要 因          |                   |              |              | 相 互 作 用     |             |             |             |             |             |             |  |
|--------|-------------|--------|--------------|-------------------|--------------|--------------|-------------|-------------|-------------|-------------|-------------|-------------|-------------|--|
|        |             |        | ①<br>上 下     | ②<br>陳 感 疑        | ③<br>都 県     | ④<br>男 女     | ①<br>×<br>② | ①<br>×<br>③ | ①<br>×<br>④ | ②<br>×<br>③ | ②<br>×<br>④ | ③<br>×<br>④ | そ<br>の<br>他 |  |
| 2      | 12          | 9.8    | 10.8> 8.8 ** | 10.5> 9.6> 9.3 ** | 10.1> 9.6    | 9.6<10.0     |             |             |             |             |             |             |             |  |
| 5      | 18          | 15.0   | 16.1>13.9 ** | 15.4<15.7>13.8 ** | 15.3>14.7 *  | 14.9<15.1    | *           |             |             |             |             |             |             |  |
| Ⅱ      | 18          | 14.3   | 16.2>12.4 ** | 14.3<14.9>13.7 ** | 14.7>13.9 ** | 13.8<14.8 ** | **          |             |             |             |             |             |             |  |

は5～1%の水準，\*\*は1%以下の水準，計と総計欄の数字は\*の個数，○は\*\*の個数を示す，以下これに同じ。

この表から学年の進むにつれて上下差のますます顕著になることが明らかである。さらに文種別・学年別に上下群の平均正答数の差をt検定にかけた結果は，Table 3のように，上級学年になるほど危険率が低くなる。

b. 文の機能からみて 前項で取扱った資料を機能上

の文種からみて分散分析を行なった結果および詳細に分析してF検定を行なった結果が，それぞれ Table 4，Table 5 である。Table 5 から，やはり高学年になるほど上下の差の顕著になることがわかる。さらに文種別・学年別に上下群の平均正答数の差をt検定にかけた結果，Table 6 の示すように高学年が危険率は低い。

c. 主語の有無について 問題領域は省略された主語についての問題で，小学校2年では2形式中に12問

Table 5

| 文 種    |   | 陳 述 文 |   |     |     | 感 歎 文 |    |     |     | 疑 問 文 |    |     |    | 計   |     |     |     | 總<br><br>計 |
|--------|---|-------|---|-----|-----|-------|----|-----|-----|-------|----|-----|----|-----|-----|-----|-----|------------|
| 地 域    |   | 都 市   |   | 近 郊 |     | 都 市   |    | 近 郊 |     | 都 市   |    | 近 郊 |    | 性   |     | 地 域 |     |            |
| 性      |   | 男     | 女 | 男   | 女   | 男     | 女  | 男   | 女   | 男     | 女  | 男   | 女  | 男   | 女   | 都   | 近   |            |
| 学<br>年 | 2 | **    |   |     | *   | **    |    |     | *   | *     |    |     |    | 1 ② | 2   | 1 ② | 2   | 3 ②        |
|        | 5 |       |   | *   | *   |       |    | *   | **  |       | ×  | *   | ** | 3   | 1 ② |     | 4 ② | 4 ②        |
|        | Ⅱ | **    | * | **  | **  | **    | ** | **  | **  | **    | ** | **  | ** | ⑥   | 1 ⑤ | 1 ⑤ | ⑥   | 1 ⑪        |
| 計      |   | ②     | 1 | 1 ① | 2 ① | ②     | ①  | 1 ① | 1 ② | 1 ①   | ①  | 1 ① | ②  | 4 ⑧ | 4 ⑦ | 2 ⑦ | 6 ⑧ |            |
|        |   | 1 ②   |   | 3 ② |     | ③     |    | 2 ③ |     | 1 ②   |    | 1 ③ |    |     |     |     |     |            |
|        |   | 4 ④   |   |     |     | 2 ⑥   |    |     |     | 2 ⑤   |    |     |    | 8 ⑮ |     |     |     |            |

Table 6

| 学年 | 陳述文  |      | p            | 感歎文  |      | p               | 疑問文  |      | p              |
|----|------|------|--------------|------|------|-----------------|------|------|----------------|
|    | 上    | 下    |              | 上    | 下    |                 | 上    | 下    |                |
| 2  | 11.4 | 9.6  | .025 > p .01 | 10.9 | 8.4  | .005 > p > .001 | 10.3 | 8.4  | .05 > p > .025 |
| 5  | 16.5 | 14.4 | .001 > p     | 16.9 | 14.6 | .001 > p        | 14.8 | 12.8 | .001 > p       |
| II | 16.4 | 12.2 | .001 > p     | 16.9 | 13.0 | .001 > p        | 15.5 | 11.9 | .001 > p       |

Table 7

| 学<br>年 | 問<br>題<br>数 | 平<br>均 | 要 因        |            |            |            |          | 相 互 作 用 |        |        |        |        |        |        |        |        |        |
|--------|-------------|--------|------------|------------|------------|------------|----------|---------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|
|        |             |        | ①<br>上 下   | ②<br>有主 略主 | ③<br>単 複   | ④<br>都 近   | ⑤<br>男 女 | ①<br>×  | ①<br>× | ①<br>× | ①<br>× | ②<br>× | ②<br>× | ②<br>× | ③<br>× | ③<br>× | ④<br>× |
| 2      | 6           | 4.6    | 5.1>4.1 ** | 4.9>4.4 ** | 4.8>4.4 ** | 4.8>4.5 *  | 4.5<4.7  |         |        |        |        |        |        |        |        |        | *      |
| 5      | 9           | 7.0    | 7.6>6.5 ** | 7.5>6.6 ** | 7.6>6.5 ** | 7.2>6.8 ** | 7.0<7.1  |         |        |        |        |        |        |        |        |        | * *    |
| Ⅱ      | 9           | 7.1    | 8.0>6.3 ** | 7.0<7.3    | 7.4>6.8 ** | 7.3>7.0    | 6.9<7.4  |         |        |        |        |        |        |        |        |        |        |

Table 8

| 文 種 |   | 單 文 |   |    |    |     |    |    |    | 複 文 |    |    |    |     |   |   |   | 計    |    |     |    | 總 計 |
|-----|---|-----|---|----|----|-----|----|----|----|-----|----|----|----|-----|---|---|---|------|----|-----|----|-----|
|     |   | 有 主 |   |    |    | 略 主 |    |    |    | 有 主 |    |    |    | 略 主 |   |   |   |      |    |     |    |     |
| 地 域 |   | 都   |   | 近  |    | 都   |    | 近  |    | 都   |    | 近  |    | 都   |   | 近 |   | 性    |    | 地 域 |    |     |
| 性   |   | 男   | 女 | 男  | 女  | 男   | 女  | 男  | 女  | 男   | 女  | 男  | 女  | 男   | 女 | 男 | 女 | 男    | 女  | 都   | 近  |     |
| 学 年 | 2 | *   |   |    | *  | **  |    |    | *  | **  |    |    | *  | *   |   |   | * | 2②   | 2① | 2②  | 2① | 4③  |
|     | 5 |     | * | ** | ** |     |    | ×  |    | **  |    |    | ** |     |   |   | * | ①    | 2② | 1   | 1③ | 2③  |
|     | Ⅱ | *   | * |    | ** | **  | ** | *  | ** | **  | ** | *  | ** |     |   | * | * | 4②   | 2⑤ | 2④  | 4③ | 6⑦  |
| 計   |   | 2   | 2 | ①  | 1② | ②   | ①  | 1  | ②  | ②   | ①  | 1  | 1② | 1   |   | 1 | 2 | 6⑤   | 6⑧ | 5⑥  | 7⑦ |     |
|     |   | 4   |   | 1③ |    | ③   |    | 1② |    | ③   |    | 2② |    | 1   |   | 3 |   |      |    |     |    |     |
|     |   | 5 ③ |   |    |    | 1 ⑤ |    |    |    | 2 ⑤ |    |    |    | 4   |   |   |   | 12 ⑬ |    |     |    |     |
|     |   | 6 ⑧ |   |    |    |     |    |    |    | 6 ⑤ |    |    |    |     |   |   |   |      |    |     |    |     |

Table 9

| 学<br>年 | 有 主 |      |            | 略 主 |      |            |
|--------|-----|------|------------|-----|------|------------|
|        | 上   | 下    | p          | 上   | 下    | p          |
| 2      | 5.4 | >4.3 | .01>p>.001 | 4.9 | >3.9 | .01>p>.001 |
| 5      | 8.1 | >6.9 | .001>p     | 7.1 | >6.1 | .01>p>.001 |
| II     | 7.9 | >6.1 | .001>p     | 8.1 | >6.4 | .001>p     |

(単文6・複文6), 他の学年では3形式中に18問含まれている。したがって, 各文種はそれぞれ6問と9問となる。これらの問題と対応するのは, 問題領域 (I) の中の単文と複文とである。(I) では主語が省略されているが, (I) では省略されていない。また, 問題数も同じ。そこで, 成績群・主語の有無・文種・地域・性を要因とし, 要因ごとの平均正答数を求め分散分析を行なうと, Table 7 となり, さらに詳細に分析してF検定にかけた結果は Table 8 である。この表からも, 高学年で上下の差が顕著であるといえよう。さらに, 主語のある文とない文とについて, 学年別に両群の平均正答数の差についてt検定を行なった結果は, Table 9 であり, ここからも, 上級学年になるほど上下の差の危険率が低くなるこ

とは明らかである。なお, 省略された主語を理解することは, 上級学年になつて純国語的な文になれてくると, 主語のある文について主語を理解することよりもかえつて容易となり, しかもそれは, 主として複文について妥当するといわれる(3)。

d. 主語の位置について 問題領域(I)では, 述語が近くにある文・遠くにある文・中間にある文, それぞれ1形式中に2問ずつ含まれていて, いずれも主語に対して述語, 述語に対して主語を理解させる問題1問ずつからできている。したがって適用形式から考えると, 遠くにある主語を理解する問題は, 小学校2年1問, 小学校5年3問, 中学校Ⅱ年2問である。他の文種もこれと同じ。そこで成績群・主語の位置・主語述語の理解・地域・性を要因とし, 学年別に平均正答数を算出して分散分析を行なった結果は Table 10, 詳細に分析してF検定を行なった結果は Table 11 である。後者から上級学年になるほど上下の差の顕著になることが認められる。なお主語が中間にある文についてその主語を理解することは, 小学4年を転機として以後, 遠い主語を理解することよりもかえつて困難になることが認められている(3)。

Table 10

| 学<br>年 | 問<br>題<br>数 | 平<br>均 | 要 因          |                   |              |             |             | 相 互 作 用                                  |
|--------|-------------|--------|--------------|-------------------|--------------|-------------|-------------|------------------------------------------|
|        |             |        | ①<br>上 下     | ②<br>中 遠 近        | ③<br>主 述     | ④<br>都 市    | ⑤<br>男 女    |                                          |
| 2      | 1           | 0.82   | 0.90>0.74 ** | 0.80=0.80<0.90    | 0.73<0.94 ** | 0.85>0.79 * | 0.79<0.85 * | ①①①①②②②③③④④<br>××××××××××<br>②③④⑤③④⑤④⑤⑤他 |
| 5      | 2           | 2.32   | 2.55>2.09 ** | 2.13<2.23<2.61 ** | 2.12<2.53 *  | 2.41>2.24   | 2.36>2.28   | * **                                     |
| II     | 3           | 1.55   | 1.76>1.35 ** | 1.41<1.54<1.71 ** | 1.41<1.70 ** | 1.54<1.56   | 1.53<1.58   | *                                        |

Table 11

| 文 種 | 主 語 |    |   |    |   |   | 述 語 |   |     |    |     |     | 計    |     | 総 計 |     |      |     |
|-----|-----|----|---|----|---|---|-----|---|-----|----|-----|-----|------|-----|-----|-----|------|-----|
|     | 中   |    | 遠 |    | 近 |   | 中   |   | 遠   |    | 近   |     |      |     |     |     |      |     |
| 地 域 | 都   | 近  | 都 | 近  | 都 | 近 | 都   | 近 | 都   | 近  | 都   | 近   | 性    | 地 域 |     |     |      |     |
| 性   | 男   | 女  | 男 | 女  | 男 | 女 | 男   | 女 | 男   | 女  | 男   | 女   | 男    | 女   | 男   | 女   | 都    | 近   |
| 学 年 | 2   | *  |   |    | * |   | *   |   | *   |    |     |     | **   |     | 4 ① |     | 4 ①  | 4 ① |
|     | 5   | ** | * | ** |   |   |     |   |     | *  |     |     | *    | *   | 1 ② | 5   | 2 ①  | 4 ① |
|     | Ⅱ   |    |   |    | * |   | *   | * | *   | ** | **  | **  | *    | **  | 5 ③ | 1 ② | 4 ①  | 2 ④ |
| 計   | 1 ① | 1  | ① |    | 2 |   | 1   | 2 |     |    | 2   | 1   | 1 ①  | ①   | ①   | 1   | 1 ①  | 1 ① |
|     | 2 ① |    | ① |    | 2 |   | 1   |   | 2   |    | 2   | 2 ① | ①    | 1 ① | 2 ① | 2 ② | 10 ⑥ | 6 ② |
|     | 2 ② |    | 3 |    | 2 |   | 4 ① |   | 1 ② |    | 4 ③ |     | 16 ⑧ |     |     |     |      |     |
|     | 7 ② |    |   |    |   |   | 9 ⑥ |   |     |    |     |     |      |     |     |     |      |     |

Table 12

| 学<br>年 | 問<br>題<br>数 | 平<br>均 | 要 因            |               |                |                | 相 互 作 用                      |
|--------|-------------|--------|----------------|---------------|----------------|----------------|------------------------------|
|        |             |        | ①<br>上 下       | ②<br>主 述      | ③<br>都 近       | ④<br>男 女       |                              |
| 2      | 18          | 14.74  | 16.27>13.21 ** | 14.17<15.31 * | 15.15>14.33    | 14.45<15.03    | ①①①②②③<br>××××××の<br>②③④③④④他 |
| 5      | 27          | 22.49  | 24.10>20.88 ** | 22.68>22.31   | 22.93>22.04 *  | 22.33<22.66    |                              |
| Ⅱ      | 27          | 21.45  | 24.33>18.56 ** | 21.61>21.28   | 22.05>20.84 ** | 20.63<22.26 ** |                              |

Table 13

| 文 種         |   | 主 語 |    |     |     | 述 語 |   |     |     | 計   |     |     |     | 総<br>計 |
|-------------|---|-----|----|-----|-----|-----|---|-----|-----|-----|-----|-----|-----|--------|
| 地 域         |   | 都   |    | 近   |     | 都   |   | 近   |     | 性   |     | 地 域 |     |        |
| 性           |   | 男   | 女  | 男   | 女   | 男   | 女 | 男   | 女   | 男   | 女   | 都   | 近   |        |
| 学<br>年<br>Ⅱ | 2 | **  |    |     | *   | **  |   | ×   | *   | ②   | 2   | ②   | 2   | 2 ②    |
|             | 5 |     |    | *   | ×   |     |   | *   | *   | 2   | 1   |     | 3   | 3      |
|             | Ⅱ | **  | ** | **  | **  | **  | * | **  | **  | ④   | 1 ③ | 1 ③ | ④   | 1 ⑦    |
| 計           |   | ②   | ①  | 1 ① | 1 ① | ②   | 1 | 1 ① | 2 ① | 2 ⑥ | 4 ③ | 1 ⑤ | 5 ④ |        |
|             |   | ③   |    | 2 ② |     | 1 ② |   | 3 ② |     |     |     |     |     |        |
|             |   | 2 ⑤ |    |     |     | 4 ④ |   |     |     | 6 ⑨ |     |     |     |        |

Table 14

| 学<br>年 | 主 語   |       |            | 述 語   |       |            |
|--------|-------|-------|------------|-------|-------|------------|
|        | 上     | 下     | p          | 上     | 下     | p          |
| 2      | 15.65 | 12.68 | .01>p>.001 | 16.88 | 13.73 | .01>p>.001 |
| 5      | 24.27 | 21.08 | .001>p     | 23.93 | 20.68 | .001>p     |
| Ⅱ      | 24.28 | 18.93 | .001>p     | 24.38 | 18.18 | .001>p     |

e. 主語の理解と述語の理解 問題領域(Ⅰ)は主語の理解9問, (Ⅱ)は述語の理解9問であるから, 2形式を適用された小学校2年は, (Ⅰ)18問, (Ⅱ)18問となる。同様にして, 他の学年は(Ⅰ)(Ⅱ)ともに27問ずつ与えられたことになる。そこで, 成績群・主語と述語との理解・地域・性を要因として平均正答数を算出し, 分散分析を行なった結果は Table 12, さらに詳細に分析してF検定を行なった結果は Table 13 である。後者から, 上下の差が高学年になって顕著になることがわかる。また, 主語述語それぞれの理解について, 学年別に上下の差をt検定にかけた結果は, Table 14 であつて, これから差の危険率が漸次低くなることが認められる。

f. 性差 Table 1, 4, 12 から, 中学Ⅱ年に至り性差の明瞭になることが推定できるが, どの表でも要因①との間に相互作用が認められるのでさらに分析すると, 下群における性差の顕差であることがわかつた。

## B. 第Ⅱ調査

a. 上下両群における得点分布の $\chi^2$ 検定 指示語・逆接・順接の3問題領域のおのおのについて, 構造上および機能上の文種別による学年ごとの得点分布を求め, これを $\chi^2$ 検定にかけた結果は, すべてのばあい5%以下の危険率で有意差が両群間に認められ, ほとんどの場合に

0.1%以下の危険率であつた。しかも, 上級学年になるにつれて危険率の低いばあいが多くなつていた。この点は, 第Ⅰ調査の結果と同じ傾向を示すものである。

b. 上下両群における正答率間の差 各問題領域における構造上および機能上の文種について, 上下両群の正答率の差を求めると, Table 15~18となる。これらの表から, (1)指示語では単文における差がほとんどの学年で最も少なく, 複文のそれが小学校4年以後最も多い, (2)指示語では陳述文における差がほとんどの学年で最も多い, (3)逆接では複文における差が小学校5年以後最も少ない, (4)全問題領域を通じ, 差は小学校5年以後単文が最も少なく重文のそれが最も多い, (5)全問題領域を通じ, 差は小学校2年から中学校Ⅱ年まで命令文が最も少ない, (6)機能上の文種については一義的なことがいえない, (7)問題領域別にみると, ほとんどの学年において指示語における上下の差が最も少ない, 小学

Table 15

| 学 年 |    |     | 1     | 2     | 3     | 4     | 5     | 6     | I     | II    | III   |
|-----|----|-----|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|
| 指示語 | 構造 | 単文  | 36.04 | 23.96 | 26.11 | 14.86 | 25.97 | 12.22 | 20.07 | 16.94 | 20.00 |
|     |    | 複文  | 42.29 | 24.38 | 22.24 | 19.72 | 29.72 | 19.03 | 32.08 | 23.89 | 28.05 |
|     |    | 重文  | 52.71 | 25.62 | 29.30 | 15.00 | 26.94 | 17.36 | 26.25 | 23.89 | 27.77 |
|     | 機能 | 陳述文 | 40.27 | 24.17 | 28.52 | 21.11 | 34.08 | 23.15 | 32.41 | 26.30 | 33.70 |
|     |    | 疑問文 | 45.00 | 27.50 | 27.96 | 13.89 | 23.70 | 11.30 | 23.89 | 20.93 | 20.19 |
|     |    | 感嘆文 | 43.06 | 22.50 | 22.40 | 14.63 | 28.52 | 18.15 | 30.93 | 25.19 | 29.25 |
|     |    | 命令文 | 46.39 | 24.45 | 24.81 | 16.49 | 23.89 | 12.22 | 18.15 | 13.89 | 17.96 |

Table 16

| 学 年 |    |     | 1     | 2     | 3     | 4     | 5     | 6     | I     | II    | III   |
|-----|----|-----|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|
| 逆接  | 構造 | 単文  | 26.34 | 36.25 | 40.97 | 34.59 | 36.67 | 21.25 | 31.25 | 29.44 | 32.23 |
|     |    | 複文  | 25.00 | 34.17 | 44.45 | 38.19 | 34.72 | 14.73 | 27.78 | 24.45 | 25.83 |
|     |    | 重文  | 15.63 | 27.91 | 38.20 | 35.69 | 39.58 | 21.67 | 36.81 | 29.16 | 34.17 |
|     | 機能 | 陳述文 | 21.11 | 37.78 | 46.85 | 30.56 | 35.00 | 19.81 | 32.23 | 25.74 | 30.74 |
|     |    | 疑問文 | 11.95 | 23.06 | 39.63 | 39.26 | 37.59 | 19.07 | 32.97 | 26.11 | 26.67 |
|     |    | 感嘆文 | 26.67 | 34.44 | 44.08 | 42.78 | 42.59 | 22.78 | 32.04 | 31.11 | 34.44 |
|     |    | 命令文 | 29.44 | 35.83 | 34.26 | 32.04 | 32.78 | 15.19 | 30.56 | 27.77 | 31.11 |

Table 17

| 学 年 |    |     | 1     | 2     | 3     | 4     | 5     | 6     | I     | II    | III   |
|-----|----|-----|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|
| 順接  | 構造 | 単文  | 33.96 | 35.83 | 40.56 | 37.23 | 36.53 | 24.44 | 35.97 | 28.19 | 29.31 |
|     |    | 複文  | 43.33 | 32.92 | 37.22 | 30.14 | 38.19 | 26.11 | 36.39 | 28.20 | 28.61 |
|     |    | 重文  | 22.71 | 29.37 | 38.19 | 35.97 | 38.06 | 23.61 | 35.27 | 32.36 | 34.30 |
|     | 機能 | 陳述文 | 32.78 | 32.22 | 45.32 | 35.74 | 37.60 | 24.26 | 35.00 | 25.75 | 25.55 |
|     |    | 疑問文 | 30.55 | 31.67 | 36.11 | 32.59 | 36.67 | 28.33 | 39.82 | 29.63 | 33.89 |
|     |    | 感嘆文 | 31.39 | 33.89 | 38.52 | 34.07 | 37.41 | 24.08 | 32.41 | 30.19 | 29.08 |
|     |    | 命令文 | 38.61 | 33.06 | 36.48 | 35.37 | 38.70 | 22.22 | 36.30 | 32.78 | 34.45 |

Table 18

| 学 年 |    |     | 1     | 2     | 3     | 4     | 5     | 6     | I     | II    | III   |
|-----|----|-----|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|
| 計   | 構造 | 単文  | 32.11 | 32.01 | 35.88 | 28.89 | 33.06 | 19.30 | 29.31 | 24.86 | 27.18 |
|     |    | 複文  | 36.87 | 30.49 | 34.64 | 29.35 | 34.21 | 19.96 | 32.08 | 25.51 | 27.50 |
|     |    | 重文  | 30.35 | 27.63 | 35.23 | 28.89 | 34.86 | 20.88 | 32.78 | 28.47 | 32.08 |
|     | 機能 | 陳述文 | 31.39 | 31.39 | 39.63 | 29.14 | 35.56 | 22.41 | 33.21 | 25.93 | 30.00 |
|     |    | 疑問文 | 29.17 | 27.41 | 34.57 | 28.58 | 32.65 | 19.57 | 32.23 | 25.56 | 26.92 |
|     |    | 感嘆文 | 33.71 | 30.28 | 35.00 | 30.49 | 36.17 | 21.67 | 31.79 | 28.83 | 30.92 |
|     |    | 命令文 | 38.15 | 31.11 | 31.85 | 27.97 | 31.79 | 16.54 | 28.34 | 24.81 | 27.84 |
|     | 領域 | 指示語 | 43.68 | 24.65 | 25.93 | 16.53 | 27.55 | 16.20 | 26.34 | 21.58 | 25.28 |
|     |    | 逆接  | 22.30 | 32.78 | 36.58 | 36.15 | 36.99 | 18.75 | 31.95 | 27.68 | 30.74 |
|     |    | 順接  | 33.34 | 29.23 | 38.65 | 34.44 | 37.59 | 24.72 | 35.88 | 29.58 | 30.74 |

Table 19

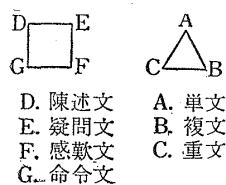
| 学 年   |   | 1     | 2     | 3     | 4     | 5     | 6     | I     | II    | III   |
|-------|---|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|
| 指 示 語 | 上 | 75.90 | 88.26 | 92.27 | 95.51 | 95.00 | 88.19 | 89.77 | 93.15 | 93.61 |
|       | 下 | 32.22 | 63.61 | 66.34 | 78.98 | 67.45 | 71.99 | 63.43 | 71.57 | 68.33 |
| 逆 接   | 上 | 45.56 | 68.96 | 79.31 | 85.83 | 89.54 | 84.72 | 87.69 | 92.73 | 93.01 |
|       | 下 | 23.26 | 36.18 | 42.73 | 49.68 | 52.55 | 65.97 | 55.74 | 65.05 | 62.27 |
| 順 接   | 上 | 55.35 | 75.69 | 80.46 | 85.32 | 85.60 | 77.27 | 82.27 | 86.76 | 86.25 |
|       | 下 | 22.01 | 46.46 | 41.81 | 50.88 | 48.01 | 52.55 | 46.39 | 57.18 | 55.51 |

校5年以後ではその値が常に指示語について逆接, 次に順接の順になっていることがわかる。

ところで, 問題領域別に両群の正答率をみると Table 19が示すように, 指示語の正答率が両群とも全学年において最高であり, 小学校5年以後両群の正答率は常に逆接・順接の順になっている。(7) は, この事実と関係があると思われる。

c. 各群における各文種の平均正答数間の差と正答率間の差 群別・問題領域別・学年別に各文種の平均正答数を算出し, それら相互間の差について t 検定を行ない, 5%以下の危険率で有意差の認められたものを示したの

Fig. 1



が, Fig.2から Fig.7 までである(本図では, Fig.1に示したとおり, 構造上および機能上の文種間の関係をそれぞれ3角形および4角形で表現した。△は単文>重文と複文>重文とを意味

Fig. 2

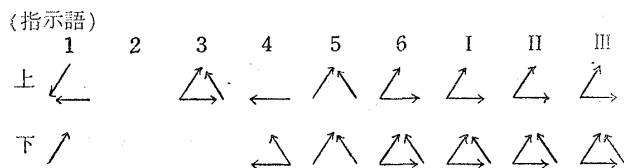


Fig. 3

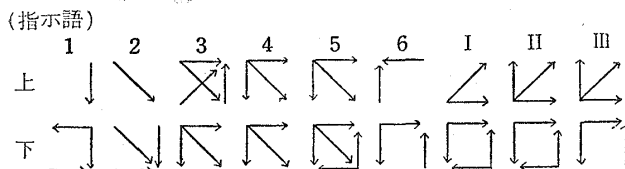


Fig. 4

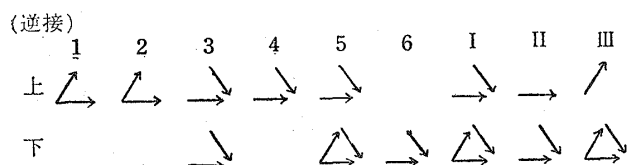


Fig. 5

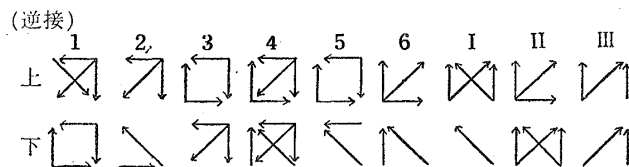


Fig. 6

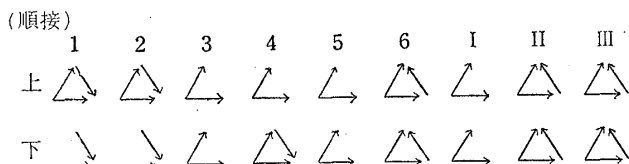
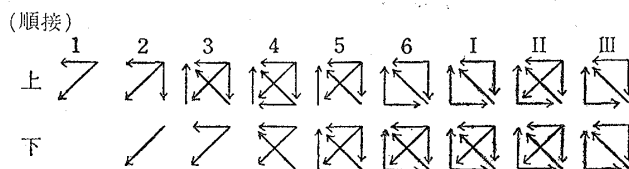


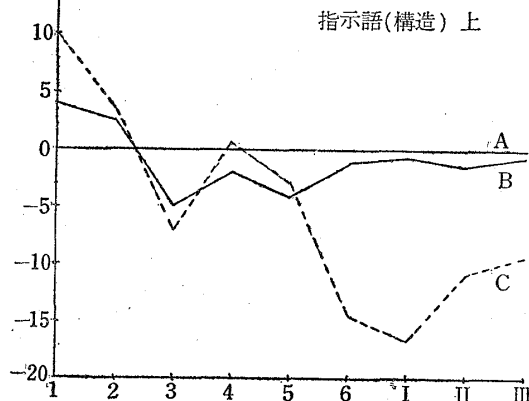
Fig. 7



する。他もこれに準ずる)。

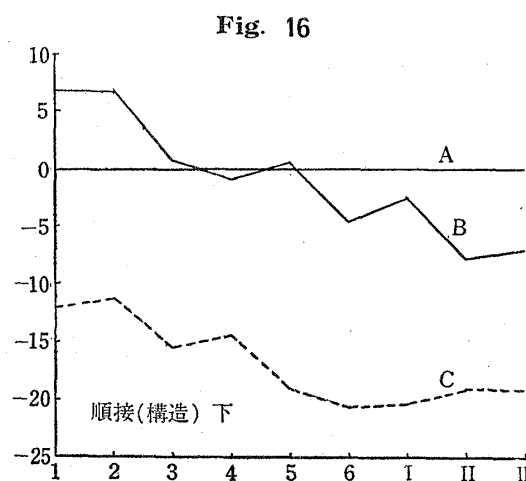
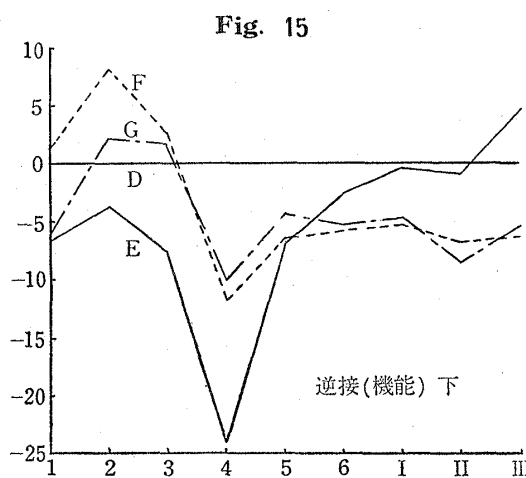
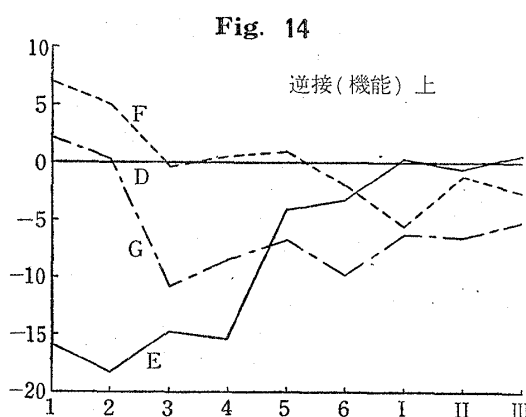
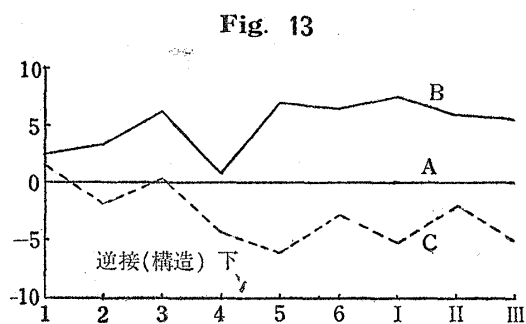
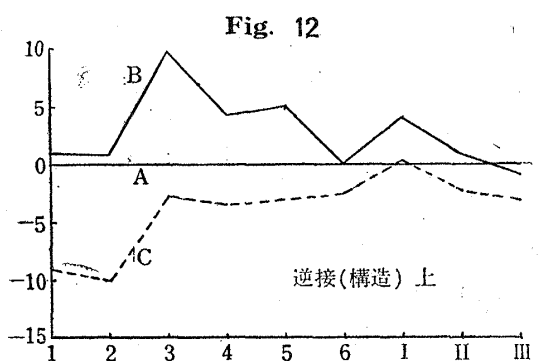
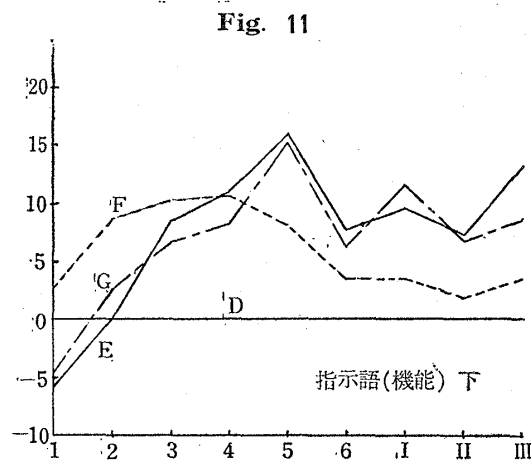
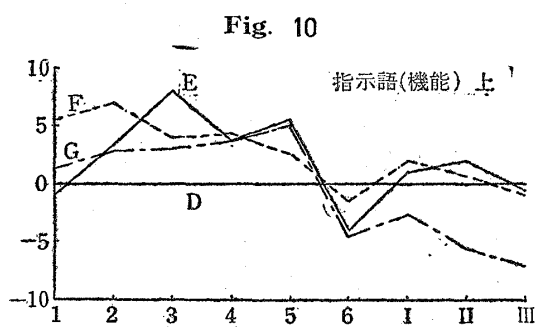
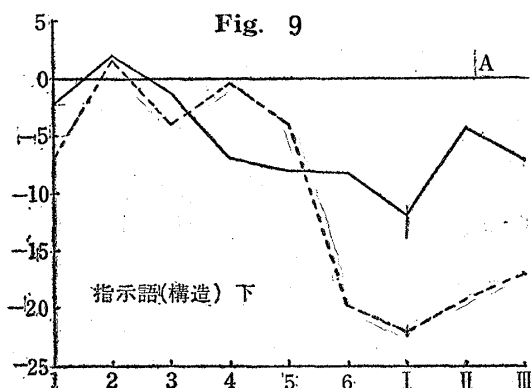
さらに, 各群における各文種の正答率を算出し, それら相互間の差を示したのが, Fig. 8から Fig. 19までである。構造上の文種については単文からの差をもつて示し, 機能上の文種については陳述文からの差をもつて示した。したがって, 図中下方にある文種の方が, より理

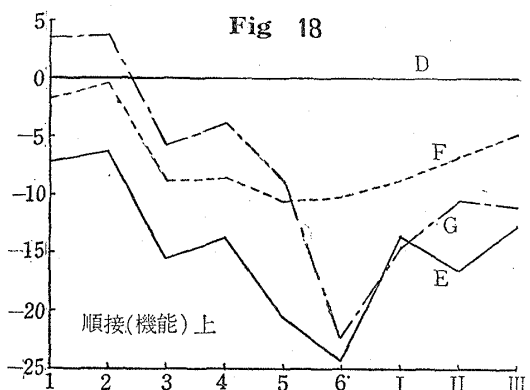
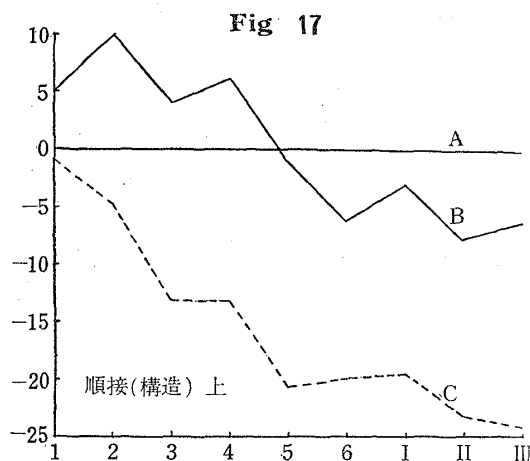
Fig. 8



解困難であることを意味する。縦軸は文種間の差(%)を、横軸は学年を示している。

これらの図から次のことが明らかである。(1)指示語について (1)構造上の文種では、学年によるその消長が小学3年以後相互にきわめてよく似ているが、上群では単文と複文との差がしだいに僅少となつていくのに反し、

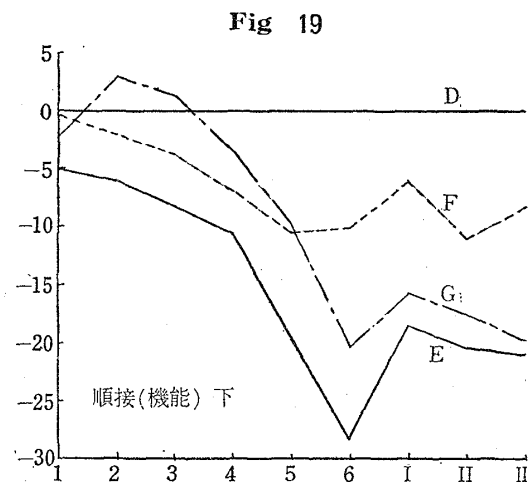




下群では必ずしもそうとはいえない。概して単文が理解容易である (Fig. 2, 8, 9)。(2) 上群では陳述文が小学校2年から同5年まで最も理解困難であるが、下群では小学2年以後常に最も理解困難である (Fig. 3, 10, 11)。(4) 逆接について (1) だいたい複文・単文・重文の順に理解容易となっており、複文は常に重文よりも理解されやすい (Fig. 4, 12, 13)。(2) はじめに理解困難であった疑問文は、しだいに理解されやすくなり、それに比べて感謝文や命令文の方が理解困難となる (Fig. 5, 14, 15)。ここでは、曲線の傾向からみると、陳述文・疑問文・感謝文と命令文の3群にわけ

てみるのが自然であるように思われる。

(4) 順接について (1) どの群においても、単文と複文とは、重文よりも常に理解されやすい。複文ははじめの単文よりも理解されやすいが、小学校5年頃を転機としてかえって理解されにくくなる (Fig. 6, 16, 17)。(2) どの群においても疑問文が最も理解困難であり、命令文の曲



線の消長は疑問文のそれに近い (Fig. 7, 18, 19)。ここでは、曲線の傾向からみると、命令文と疑問文、感謝文と陳述文の2群にわけてみるのが自然であるように思われる。

(4) 構造に関して b(1) と c(1) (1), b(2) と c(1) (4), b(3) と c(4) (1), b(7) とから、次のことがいえるのではなからうか。理解しやすい文種では上下の差が少なくなり、理解困難な文種ではその差が大きくなると。ただしこのことは部分的に妥当すると考えられる。

b(7), c(4) (1), c(4) (1) から、次のことが考えられるのではなからうか。指示語の問題では、逆接や順接のばあいと異なり、すでに示されている第1の文中から、指示語の意味するものを選び出すことが要求される。しかるに、逆接や順接の問題では、2個の文意から両者の関係を考え出すことが要求される。したがって、指示語の問題の方がやさしい。それゆえ、指示語では低学年において理解の容易な度合が単文や複文や重文の間で、順接不同になつていても、結局は次第に単文・複文・重文の順

Table 20

| 学<br>年 | 上    |       |       |       | 下    |       |       |       |
|--------|------|-------|-------|-------|------|-------|-------|-------|
|        | 単一複  | 単一重   | 複一重   | 平均    | 単一複  | 単一重   | 複一重   | 平均    |
| 1      | 6.53 | 10.35 | 14.24 | 10.37 | 3.26 | 3.06  | 3.34  | 3.33  |
| 2      | 3.47 | 8.33  | 10.14 | 7.31  | 4.72 | 2.84  | 6.32  | 4.63  |
| 3      | 5.14 | 6.30  | 10.97 | 7.47  | 3.84 | 5.74  | 8.66  | 6.08  |
| 4      | 2.36 | 6.16  | 7.96  | 5.50  | 4.58 | 6.06  | 10.65 | 7.10  |
| 5      | 3.24 | 8.38  | 9.68  | 7.10  | 5.32 | 10.18 | 12.18 | 9.23  |
| 6      | 1.94 | 12.59 | 10.65 | 8.40  | 6.95 | 14.17 | 11.57 | 10.90 |
| I      | 2.41 | 12.41 | 12.50 | 9.11  | 7.50 | 15.69 | 13.20 | 12.13 |
| II     | 3.38 | 10.88 | 8.15  | 7.47  | 7.36 | 14.49 | 11.11 | 10.99 |
| III    | 2.87 | 10.56 | 8.15  | 7.19  | 6.44 | 15.46 | 12.73 | 11.54 |
| 平均     | 3.48 | 9.55  | 10.27 | 7.77  | 5.55 | 9.74  | 10.01 | 8.42  |

におちついていく。逆接では、あまり構造の単純すぎる単文よりも、やや複雑な複文における方がかえって関係の発見に好都合となる。順接では、はじめは逆接と同様複文・単文・重文の順に理解容易であるが、後には指示語と同様単文・複文・重文の順におちついていく。

(4) 機能に関して、c(4)(2)とc(4)(2)とをあわせ考えるとき、このように逆接と順接とで文種の群化が異なるのは、なんらかの理由にもとづくものと思われる。すなわち、陳述文と疑問文とでは、平明な文意が表現されるが、感歎文と命令文とではかなり情緒的なものにものが表現されている。また、陳述文と感歎文とは、読み手の反応を期待しないが、命令文を疑問文とはそれを期待している。このような各文種それぞれの意味と

順接や逆接との関係から、上掲のような群化が起こったのではないだろうか(4)。しかし文種と文関係とからなぜそのような群化が生ずるのか、その必然的な関連は、この資料からは明らかにすることができない。

d. 文種の理解困難度の分化 各文種が理解されるとき、の困難度はそれぞれ異なるが、その困難度が異なれば異なるほど、正答率間の差は当然大きくなるはずである。そこで、各文種の正答率を比較し、その差の絶対値を求めると、Table 20および21となる。これらの表から次のことが明らかになる。(1)構造上および機能上の文種の困難度は、下群では上級学年となるにつれ漸次分化していくが、上群ではかえって分化の度が低くなる傾向さえみられる。(2)構造上の文種では、重文と複文との間の分化が最も大きく、次は単文と重文との間、次は単文と複文との間となっており、この点は両群に共通している。(3)機能上の文種では、両群とも、陳述文と疑問文との間の分化が最も大きい。

#### Ⅳ 要 約

人間の言語は単語の単純な集積ではない。語と語、文と文は相互に関連しあつて、そこになんらかの志向性が

Table 21

| 群 | 学年  | 陳一疑   | 陳一感  | 陳一命   | 疑一感   | 疑一命   | 感一命  | 平均   |
|---|-----|-------|------|-------|-------|-------|------|------|
| 上 | 1   | 8.05  | 4.72 | 2.41  | 11.67 | 10.46 | 4.72 | 7.00 |
|   | 2   | 9.35  | 4.07 | 2.13  | 11.02 | 9.63  | 4.17 | 6.73 |
|   | 3   | 9.07  | 4.32 | 6.48  | 8.46  | 6.29  | 4.88 | 6.58 |
|   | 4   | 10.92 | 4.45 | 5.37  | 7.23  | 5.55  | 4.75 | 6.38 |
|   | 5   | 12.59 | 4.69 | 6.85  | 6.05  | 4.88  | 4.01 | 6.51 |
|   | 6   | 10.55 | 4.82 | 12.28 | 5.74  | 2.96  | 7.47 | 7.31 |
|   | I   | 5.06  | 5.43 | 7.78  | 3.71  | 3.70  | 3.70 | 4.90 |
|   | II  | 6.30  | 2.90 | 7.53  | 3.89  | 6.42  | 5.13 | 5.36 |
|   | III | 4.57  | 2.78 | 8.34  | 3.77  | 4.63  | 4.94 | 4.83 |
|   | 平均  | 8.50  | 4.24 | 6.57  | 6.84  | 6.06  | 4.86 | 6.18 |
| 下 | 1   | 5.83  | 1.48 | 4.35  | 7.13  | 1.48  | 5.65 | 4.32 |
|   | 2   | 3.15  | 1.29 | 2.59  | 8.15  | 5.74  | 5.70 | 5.28 |
|   | 3   | 8.09  | 5.49 | 3.27  | 5.43  | 6.91  | 3.09 | 5.38 |
|   | 4   | 14.57 | 9.81 | 7.28  | 5.37  | 7.90  | 2.53 | 7.91 |
|   | 5   | 14.14 | 8.40 | 9.87  | 5.74  | 4.26  | 3.33 | 7.63 |
|   | 6   | 12.90 | 6.42 | 10.62 | 8.59  | 4.01  | 4.57 | 7.85 |
|   | I   | 9.51  | 5.00 | 10.68 | 7.84  | 3.89  | 6.17 | 7.18 |
|   | II  | 9.51  | 6.54 | 10.99 | 6.79  | 3.58  | 4.44 | 6.98 |
|   | III | 12.84 | 6.05 | 11.36 | 10.99 | 5.19  | 5.80 | 8.71 |
|   | 平均  | 10.06 | 6.17 | 7.89  | 7.34  | 4.77  | 4.59 | 6.80 |

貫いている。この志向性をとらえることが読解である。したがって、語と語、文と文との関係を理解することが、読解の本質であると考えられる。本研究は、主語・述語・指示語・逆接・順接の理解を調査することにより、そのような読解の本質的機能がすでに学業不振児において劣っていること、学年の進行につれて優秀児との間に有意差のみられるばあひが多くなり、またその差の危険率が低くなっていることを明らかにしたのである。

#### 文 献

- (1) Vernon, M. D. : *Backwardness in reading*. Cambridge University Press, 1957, 75~174.
- (2) 泉井久之助：言語の構造。弘文堂、1939, 4~6.
- (3) 吉岡一郎：読解力の発達。教育心理学大系15巻、(未刊)
- (4) 秋山俊夫：読解力の発達——指示語・逆接・順接からみて——広島大学教育学部紀要、第1部第6号 1958.

なお、本稿では参考文献の指摘は最少限にとどめ、他は本号所載の吉岡一郎の論文にゆずる。

(1957年9月21日受稿)